病院新聞

発行所　病院新聞社
東京都千代田区平河町２－４－１
日本都市センター会館 12F〒102-0093
TEL　03－3265－9997
FAX　03－3265－2937
https://www.byoinshinbun.com
郵便振替口座　00170-7-59445

今週の紙面
次期改定に向け、入院と外来を議論 ①
専攻医募集のシーリングは前年度と同数に ②
医師臨床研修の第三者評価でヒアリング ②
横浜市大院、医療の「へき地度」100段階に ②
和歌山県の3病院がん免疫療法で連携 ③
国立大学病院が22年度決算速報値 ③
日慢協、寝たきり「治す」医療者へ ③
10～24歳の自殺増、女性に顕著 ③
富士フイルムメディカル、アレルギー検査市場へ参入 ④
島津、紫外線照射を用いた除菌システム開発へ ④

『病院新聞』電子版を無料公開

新型コロナ対応に日々奮闘する医療従事者の皆様に感謝と敬意を込めて本紙購読者の皆様に電子版を無料公開中です。QRコードは不定期で変わります。最新号のQRコードから電子版にお入りください。

和歌山県の3病院が連携し重症化防ぐ
がん免疫療法の副作用治療

和歌山県の橋本市民病院（駿田直俊院長、橋本市）と和歌山県立医科大学附属病院紀北分院（廣西昌也分院長、伊都郡）および医療法人南労会紀和病院（山上裕機院長、橋本市）は6月1日、『患者第一』を目的に、同県初となる〝伊都橋本医療圏免疫療法サポートチーム（Ito-Hashimoto ICI Support System：アイアイサポートチーム）〟を発足。地域の病院であっても標準治療が提供できる環境を整え、3病院が一枚岩となり迅速な連携で患者を支えていくシステムを構築した。発起人である紀和病院の梅村定司・ブレストセンター長は「全国のモデルケースになれば」としている。

6月23日に橋本市民病院で開かれた記者発表。左から、中村公紀・橋本市民病院副院長、廣西・紀北分院分院長、駿田・橋本市民病院院長、居平典久・紀和病院副院長、梅村・同ブレストセンター長

アイアイサポートチーム

がん治療の4番目の柱となる、がん免疫療法は従来の抗がん剤治療による化学療法よりも、吐き気や脱毛などの副作用が少ない反面、全身に様々な重篤な副作用が起こる可能性があることが分かってきた。また、抗がん剤の副作用よりもコントロールが難しく、安心安全な治療の提供には、それぞれ全身臓器の専門医の治療が不可欠で、各専門医がチームとなって対応する必要性がある。一方、地域によっては、都市部の大学病院やがんセンターのように1施設で全診療科や専門医が揃う施設が少なく、地域の1病院で治療を進め、免疫副作用（irAE）が発現した場合、臓器によっては診療科や専門医が存在しないなどの限界があった。

こうした現状を踏まえ、梅村氏は「地域においては専門性や特徴の違う中小の病院同士が施設の垣根を超えた連携体制、チーム作り、情報の共有を進めることで総合病院なみの診療体制が築ける」と考え、近隣の橋本市民病院および県立医大附属病院紀北分院に呼びかけ、アイアイサポートチームを発足させた。

主な特徴として、3病院共通の診療対応表を運用し、同院内での他科紹介と同様にスムーズにそれぞれの副作用に対応する専門医へ紹介できるシステムを構築した。また、副作用が重症化する前に早期発見するために、様々な専門診療科の医師、看護師、薬剤師らが連携し3病院共通の「ICIシール」を作成した。ICIは注射薬のため投与歴が分かりにくいという欠点があったが、お薬手帳に貼付することで、病院や調剤薬局だけでなく、救急隊など患者の関係者全てがirAEの初期症状に素早く気付ける仕掛け作りも試みている。

「ICIシール」を貼付したお薬手帳

地域の病院でも標準治療を提供

アイアイサポートチームの発足により、地域の病院であっても標準治療が提供できる環境を整え、3病院が一枚岩となり迅速な連携で患者を支えていくシステムを構築した。今後は、副作用に関する知識を習得する勉強会や症例検討会なども定期的に開催していくとの方針を示した。

梅村氏は「このチームは、がん治療を受ける患者さんやご家族が安心して免疫療法を受けていただき、また医療者も安全な治療が自信をもって提供できるために結成したものであり、この病院の垣根を超えた取組みが全国のモデルケースになればと願っている」との意気込みを示した。